

意欲・生きがいへの支援
ー折り紙という手段を使ってー

学籍番号 17cc13 佐原匠

I. はじめに

今回実習を行った介護老人福祉施設では入浴や食事、機能訓練、療養上のお世話を提供しており、またフロアが分かれており、私が担当したフロアは比較的軽度の認知症をわずらっている方に介護を提供していた。

その中で今回研究対象として選定することとした利用者 A 様に会い、意欲とは何なのか、どのようにして引き出すのかを考えるきっかけとなった。

また実習当初、A 様との会話ではマイナスな発言が見られた。私がこの方と関わることで少しでもやりがい、生きがいを感じていただけるようにするため A 様を受け持ち利用者として選定しようと考えた。

私は A 様の介護計画を基に意欲、生きがい感についてどのようなアプローチを行えば A 様にとって良い介護が提供できるかを論文による他者の視点から再考した。

II. 実習先種別・実習期間

実習先種別：介護老人福祉施設

実習期間：2018 年 6 月 25 日～2018 年 7 月 27 日（23 日間）

III. 受け持ち利用者の紹介

氏名：A 様 性別：女性 年齢：80 代前半

介護が必要になった主な疾患・障害：乳がん ・脳出血 ・左変形性膝関節症 ・脳梗塞
・骨粗鬆症 ・左片麻痺 ・認知症

ADL

移動：車椅子自走可

食事：滑り止めマット、スプーン使用による自力摂取

排泄：トイレ誘導による排泄、手すりをつかんで排泄の姿勢がとれる

更衣：上衣→左側の着脱は可 下衣→ズボンの着脱は可 靴と下肢装具の着脱は可

IV. 介護の実際

1. 情報の解釈・関連づけ・統合

以前は親族の面倒を見ることで忙しかったが、現在は左半身不自由なためできることが限られてしまっている。しかし、A 様ご本人はできることはやりたいという思いから、挑戦することに失敗してしまうことがあっても性格的に職員の方を頼れず、私にはもう何もできないという気持ちになってしまっていると思われる。

2. 介護上の課題：

- (1) 生活の中に楽しみを見つけ、自信を取り戻していく必要がある。
- (2) A 様自身が以前のように歩けないという気持ちと向かい合いながら、生活の中で歩行練習をする必要がある。

3. 介護計画

長期目標：できることを積み重ね、自信を付けていくことで「諦め」を「希望」に変える事ができる。

短期目標：①折り紙で鶴の折り方を覚え、1人で作ることができる
②歩行訓練を行うことができる

具体的援助内容

以下から、短期目標①について報告する。

・折り紙の実施

- (1) 折り紙の使用
- (2) 空き時間に折り紙を行う
- (3) A 様の隣に座る、折り紙が上手な B 様とコミュニケーションをとりながら行う

4. 実施及び結果

7月2日 14時

計画の実施前に、試作として A 様と一緒に一枚の紙を使って折鶴を作っていたところ、あなたとならやってみたいかもといていただいた。自分用の折り紙を用意していたようで、それを使って折鶴を作った。A 様の納得のいくものが作れなかった場合には、紙を広げてやり直し、通常の折り方よりも、折る数を多くして行った。

また、一人で行ってもらうため、隣で私が一緒に折りながら行ったところ、最後の方で一度だけ作り方を尋ねられた。あなたがいなくなっても折れるようにするとの意気込みがみられた。左手を、紙を押さえるのに利用してはどうかと促したところ、折り目をはっきりつけることができていた。

7月13日 15時

折り紙にお誘いしたところ、B 様が部屋で休みたいとの仰せだったため、計画を実施することはできなかった。職員の方の働きかけで、計画者（私）がチラシで箱を作っていたところ、A 様も作りたいとのことだったため、実施したところ、初めてであったが完成することができた。

A 様は鶴を、計画者は B 様から教わった花を折っていたところ、途中から A 様が計画者のまねをして花を途中まで折っていた。

7月14日 15時

昨日 A 様が途中まで折った花を見て、B 様から良いじゃないとの発言がみられていた。A 様は笑顔で B 様との会話を楽しんでいた。鶴を糸でつないだところ、A 様から鶴が落ち

たら残念だから一番下を紙で止めた方が良いのでは無いかとの発言があったため、A 様の希望に添って折り紙を使い固定した。

V. 考察

A 様は、左半身不自由なためできることが限られてしまっているが、できることはやりたいという思いから、右手だけで鶴を折ることを試みると実施することができた。これは活動意欲を引き出したといえるのではないだろうか。

大島ら¹⁾は高齢者が通所するデイケアでは、「作業の内容ややり方を個々の利用者に合わせてアレンジする」必要性を述べている。私の研究に置き換えると個人化した作業というのは折り目を多くしたこと、左手を活用して折り紙を押さえることだと考えられる。また、熊野²⁾は「生きがい感の形成プロセスとして、目標・夢や存在価値を感じる事が中心的要素となり、新たな自己を形成していくことで生きがい感が高まる」と述べていることから折り紙ができる A 様という新たな存在を作る支援ができたことで生きがい感に対するアプローチができたのではないかと考えられる。自分は A 様に対して自信を持たせる声掛けや、できない気持ちに共感するだけでなく一緒に考えることを大事にして実施をした。その結果、A 様は自分に自身が持てるようになり作品をもっと作りたいと意欲を示すようになり、また、他の利用者と職員とも折り紙に関する話題でコミュニケーションをとり、笑顔が多く見られるようになった。このことから活動ができたという気持ちが次への意欲につながったり、周りの利用者や職員という環境が A 様を作り上げていったりするのは自分は学ぶことができた。

VI. おわりに

最後に私は老人福祉施設で実習を行い、A 様や他の利用者、職員の方々と出会った。今回私が折り紙という形で A 様の意欲向上に働きかけをしたところ実習当初に比べて右手が動くようになったことや、作品を完成できたこと、折り紙を通して他の利用者や職員の方々と関わりが持てるようになったことなど喜んでいる様子が見られるようになった。これらのことから支援する側の関わり方でその人の生活を支えるだけでなく、気持ちの面でも明るい方向へ導いていけるのではないかと考えることができた。同時に、私が立てた計画を実施してくださった A 様、計画に関して様々な視点からアドバイスを下さった職員の方々、同じ利用者の立場で A 様と接する利用者の方々などお一人を支援するのに多くの人が関わっていると気付くことができた。

私は最初の実習が始まる前、介護過程を展開する上で受け持ち利用者だけと関わるのが良い評価につながるのではないかと考えていたが、この実習を通して多くの人が関わるからこそ介護が行える、展開ができるという考えに変わった。今回、私は A 様に対して自信を持たせる声掛けや、できない気持ちに共感するだけでなく一緒に考えることを大事にして実施をしたが、この先支援者として出会った方に対して寄り添うことを大切に関わっていきたいと考えている。

引用文献

- 1) 大島千佳・町島希美絵・中山功一(2016)「高齢者に意欲をもたらす活動方法と内容の

個人化」『特集(超高齢化社会と AI－社会生活支援編)』 p.343

2) 熊野道子(2011) : 「生きがい形成の心理学」 風間書房